

[報告者公募型テーマセッション]

学会のグローバル化と非英語圏からの発信
ーアジア地域からの留学生の視点を通してー

オーガナイザー：施 利平（明治大学）・山根 真理（愛知教育大学）

【趣旨】

学術におけるグローバル化の波はめざましく、家族社会学会でも 2015 年秋の『家族社会学研究』から英語投稿論文受付が開始され、本格的なグローバル化への道を歩みつつある。本企画の目的は、「非英語圏」からの留学生の経験から学会の「もう一つのグローバル化」の可能性と、それをふまえた留学生支援のあり方を考えることである。英語は、大英帝国の繁栄を受けて広がった言語であり、英語圏への留学を通して学問を「直輸入」した世界各地の研究者の影響力もあり、今日における学問の共通語の位置を占めている。日本の学術の国際的発信力における弱点を考えると、世界に日本の家族社会学の成果を知らせる点で、英語化の促進には大きな意義がある。

一方、東アジアに位置し、非英語圏出身の留学生が多く学ぶ日本での学術グローバル化を考える際、別の観点も必要だと思われる。地理的近さと社会・文化的に影響を及ぼしあってきた歴史的経緯から、アジア、特に東アジアに位置する地域の生活現象には、語彙や概念の共通性が多く存在する。家族研究史のなかにも、留学等を通して言語、概念を理解した「外国人」による、あるいはアジア諸社会の研究チームの共同作業による豊かな研究蓄積がある。非英語圏の研究者同士が互いの言語や概念の理解をはかり、相対的に近い地理的範囲での学術的共同性を育むこともグローバル化のもう一つの道筋ではないだろうか。

本セッションでは、非英語圏出身の留学生、若手研究者に、研究テーマに関する発表をするとともに、研究に即して「日本で家族社会学研究をする経験」について論じていただきたい。例えば以下の論点が考えられる。①日本で家族社会学を学び日本語で論文を書く際、どのような困難があるか。②出身国で母語での発表をする時、日本で日本語での発表をする時、国際学会で英語での発表をする時に、どのような論の相違が生じるか。③日本の家族社会学のグローバル化に対して何を求めるか。

本企画はアジア地域からの発信を主に想定している。留学生、若手研究者の意欲的な発表を期待します。